HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Relationship between neuroticism and oral health-related quality of life in patients with removable partial dentures [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	石田, 桂大
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第12588号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65357
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Keita_Ishida_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（歯学）　氏　名　石　田　桂　大

学　位　論　文　題　名

Relationship between neuroticism and oral health-related quality of life in patients with removable partial dentures

（　可撤性部分床義歯装着患者における神経症傾向と口腔関連 QOL の関連　）

補綴治療の分野において、患者の満足度は行われた治療の質とは必ずしも関係せず、また、神経症傾向の高い患者ほど全部床義歯への満足度や口腔関連Quality of life（OHRQoL）が低いことがこれまでに多数報告されていることから、一般に神経症傾向の高い患者に対して高価なもしくは長期に及ぶ歯科治療を行うことは極力避けたほうが賢明であるとされている。しかし、神経症傾向とOHRQoLの関連について、補綴治療前後で比較・検討した報告は少なく、さらに、対象を可撤性部分床義歯（RPD）に限定したものや、残存歯や欠損形態などの因子による影響を考慮したもの、治療前後でのOHRQoLの変化（治療効果）について検討したものは認められない。そこで本研究では、RPD装着予定患者における神経症傾向と補綴治療前・治療後のOHRQoLとの関連、および神経症傾向が治療効果にどのような影響を与えるかを明らかにするために、前向きコホート研究を行った。

被験者の選択基準は、2015年7月から2016年7月までに北海道大学病院歯科診療センター義歯補綴科において担当医によりRPDを作製する必要があると判断され、義歯新製を行う患者とした。除外基準としては、補綴装置の因子としてクラスプ以外の支台装置を有するもの、大連結子に鋳造バーをもたないレジン床義歯、顎顔面補綴、デンタルインプラントとの併用義歯、また、治療因子として歯冠補綴物や全部床義歯と同時に可撤性部分床義歯を装着するもの、義歯装着後に引き続き保存補綴治療を行う予定の者、さらに患者因子として、顎機能障害、重度の全身疾患を有するもの、本研究の参加にあたり同意が得られなか

った者とした。調査項目は、新義歯作製前に患者の年齢、性別、Eichner分類、神経症傾向、咬合力、OHRQoLを、義歯装着後3か月経過時に咬合力、OHRQoLを調査し、治療前後のOHRQoLの変化量から治療効果を求めた。神経症傾向とOHRQoL、咬合力の評価にはそれぞれ日本版NEO-five-factor inventory (NEO-FFI)、日本版Oral Health Impact Profile (OHIP-J)、 デンタルプレスケールを用いて評価した。

統計解析に関しては、神経症傾向と補綴治療前・治療後のOHRQoLとの相関をそれぞれSpearmanの順位相関係数により算出した。また、NEO-FFI使用マニュアルに基づき、被験者を神経症傾向が高い群（男性：～19、女性：～21)、中間の群（男性：19～26、女性：21～27)、低い群（男性：26～、女性：27～）の3群に分け、各群内でのOHIP-Jスコアの比較にWilcoxonの符号付順位和検定を用いた。さらに、従属変数を治療効果、独立変数を年齢、性別、Eichner分類、神経症傾向、咬合力の変化量、治療前のOHIP-Jスコアとし、ロジスティック回帰分析を行い、治療効果に影響を及ぼす因子を検討した。治療効果および治療前のOHIP-Jスコアは四分位点にて二値化した。なお、本研究は北海道大学病院自主臨床研究審査委員会の承認を受けて行った（自014-0434)。

選択基準を満たし、除外基準に該当しなかったもののうち、脱落したものを除いた63名（男性23名、女性40名）を対象とした。対象患者の平均年齢は67.2±8.6歳、神経症傾向スコアの平均は20.7±7.9であった。補綴治療前において、OHIP-Jスコアの平均は41.2±28.9であり、神経症傾向との間に有意な相関を認め（r=0.41 p=0.001)、神経症傾向が高い患者ほどOHRQoLが低いという関係が認められた。OHIP-Jの各領域では、機能の制限、痛み、心理的不快感、身体的障害、心理的障害において両者に有意な相関が認められた。一方、補綴治療後においてはOHIP-Jスコアの平均は25.5±22.1であり、両者に相関は認めず（r=0.07 p=0.566)、神経症傾向は治療後のOHRQoLとは無関係であるという結果が得られた。OHIP-Jの各領域においても、すべての領域で相関を認めなかった。対象患者を神経症傾向の大きさにより3群に分けた際の群内比較では、神経症傾向の高い群及び中間の群においてOHIP-J

スコアの有意な低下が認められ、特に神経症傾向が高い群では大きなOHRQoLの改善がみられた（p=0.020）。また、多変量解析の結果、神経症傾向と治療前のOHIP-Jスコアが治療効果に有意に影響を与える因子として選択され、神経症傾向が高い患者は低い患者と比較して有意に大きな治療効果が得られることが示された（オッズ比：15.13 p=0.017）。

本研究では補綴治療前において神経症傾向とOHRQoLは負の相関を認め、治療後では両者に相関を認めず、全部床義歯またはRPDを対象とした過去の報告と同様の結果が得られた。また、デンタルインプラントを対象とした過去の報告とは、治療後において異なる結果が得られたが、対象とした補綴装置の種類が大きく異なり、欠損補綴歯数や侵襲の程度、治療費などの違いによる影響と考えられる。

神経症傾向が高い人の特徴として、他人よりストレスへの対処が苦手であることが挙げられ、口腔内に種々の問題があるとそのストレスに対処できないために治療前のOHRQoLが低くなったものと推察された。しかし、補綴治療後には口腔内の問題が解決されてストレスが解消されたため、他の患者と同様のOHRQoLを得られたのではないかと考えられた。

本研究では比較的少ないサンプルサイズのため、多変量解析において、義歯への満足度に影響を与える因子として過去に報告されている義歯使用経験の有無や患者の教育水準などを独立変数に含めることができなかった。また、本研究では新義歯への順応が得られるとされている義歯装着3ヶ月後に治療後の評価を行ったが、より長期の観察が必要と考えられる。

本研究の結果から、口腔への満足が得られにくいとされている神経症傾向の高い患者であっても、可撤性部分床義歯による補綴治療により十分な満足を得ることができる可能性が示唆された。